

味ぽん

柘植史子

河岸変へて同じ顔ぶれ十三夜

覚悟あり林檎ひとつの重さほど

味ぽんをしゃばしゃば振つて豊の秋

露けさや椅子の収まる事務机

夜食とる付箋は縦に横に増え

明日できることはあしたへ螻蛄鳴けり

鶏頭の赤の奇形にやすらぐ日

漣は岸にとどかず秋燕

淡交のたのしみ幽か実紫

広き水ちひさく使ふ小鳥かな

耳を梳く葉擦れの音や雲の秋

拾ひたる木の葉へ山の日差しかな